

# 五歳児への成長

—かくれんぼと紙飛行機飛ばし—

津守 眞

五歳児・年長組になったその子は、幼稚園から家に帰った後、大人の手をかけないで過ごすことが多くなった。

## ひとりになること

この日は祖母が幼稚園に迎えに行き、家に帰るとすぐに部屋に入り、ふすまを閉めて、ひとりで何かをしていた。しばらくしてから、「テツダツター」と叫ぶ声が聞こえた。ひとりで庭の笹竹を切り、その先にひごをつけ、それをしつかりした木の棒につけて長くしようとすめるのだが、うまくいかない。私が手伝い、ひもや糸で補強するが、それでもうまくいかない。子どもにはこんなふうにしたという目的意識があつて、頭の中で試行錯

誤しているらしいが、外から見ると、黙ってひとりで何かをしている。つまり頭の中で遊んでいる。折り紙に、はさみで切れ目を入れ、七夕飾りを作り、「押しをしとかなきゃ」と独り言を言つて、じゅうたんの下に入れる。祖母が手伝おうとすると、「しわにならないようにしなければいけない」ときつく言う。はっきりとした目的意識があつて、それに合う物と合わない物とはっきりしている。

## かくれんぼ

帰り時間に幼稚園に迎えに行ったら、担任の先生が、「子どもたちがみんなどこか見えなくなったから捜してください」と大声で言つて、片目をつぶつて母親たちに

目配せした。次の瞬間、机の下、戸棚の蔭から子どもたちが姿を現して笑い転げた。ひとりだけで隠れるのではなくて、皆も隠れている。自分だけが見えなくなるのではなく、皆も見えなくなり、かくれんぼが共通の遊びになった。この日は母親ではなく祖母の迎えだったので、朝、母親に「パパちゃんは見つけれられるかしら」と子どもは心配していたのである。

ひとりで隠れるようになるまでには、その子の成長の歴史があった。

二歳、母親が外出した時、手に持って遊んでいた電車を戸棚の隅に隠して見えなくした。電車は母親の象徴で、「お母ちゃんはこのようにどこかに行ってしまう」と私共に告げているのだと思った。二歳半のころには電池入りの電車が走りだすと急いで電車を手で押さえて走らないようにした。大事な物がどこかにいってしまうのではないかと恐れていた。

五歳になつて間もなく、春休みに、いとこたちとかく

れんぼをした時、その子はひとりで隠れることにためらいがあつて、はじめは捜すほうになった。自分が隠れた時、「めじるし」と書いた紙を足元に置いた。そのうち、いとこたちは洋服ダンスの奥に隠れ、その子も隠れた。以前、その子にはそれができなかった。ナルニア国ものがたりも洋服ダンスの奥に隠れるテーマから始まる。ひとりだけでいる空間は恐怖でもあるが、同時に、想像の可能性を含んでいる。

五歳児・年長組になつて間もなく、お使いの途中で、パン屋でいとこと出会った。はじめはためらっていたが、じきにキャキャと笑い合い、ほかの子と気が合う体験をして、転んでも泣かなかつた。家に帰り、その子がかくれんぼしようと言った。はじめ家の中でやっていたが、庭に行くと言われる所がいっぱいあるよと言って、戸棚から傘を出し、広げてその中に隠れた。傘の下に隠れても半分隠れて半分見えている。次々と傘を出し、私共も、うちにこんな傘があつたのかと驚くほどのたくさ

んの傘を出した。はじめは傘の下に隠れていたが、次々に広げることがおもしろくなり、いろいろな色、花模様、縞模様など傘にはいろいろな個性があることを発見した。

### 目標に向かつて作ること

これは五歳児・年長組になって顕著なことである。

ピワの実を二階から取りたかった。苦心して樹木用のこぎりの長いさおを私と一緒に持ち、のこぎりを枝に引っ掛けてひもを引っ張ると切れる仕組みになっている。持つのは私なのだが、そこじゃだめだ、もつとこつちと指示し、私と掛け合いで実を取ることに協力する。地面に実が落ちると、張り切ってその場所に拾いに行く。それを台所で袋に入れて洗い、瓶に入れる。自分でほとんどやる。

蚊がひどくて、蚊取り線香下げを、時間をかけて作る。ひもを張って線香を下げられるようにするのだが、

ピワを取るのを一時やめて、それに専念する。ピワを取りながらの仮の目標だから、活動の出入りが自由である。その時次第でいつやめてもいいし、目標をきつく決めない。

昼食後、トイレ掃除を始めた。まわりを水浸しにするのが当然の家庭の仕事である。そのためにどうするかと大人と共通の目的をもち、手順について話しながらする。高い所をきれいにしようと、何か月も前に切った長い木の枝を庭から捜してきて、先端に濡れ布をつけた。布が落ちると何度でもやり直した。一段階ずつ大人と子どもとの共同の過程である。始終にこにこしている。与えられた目標ではなく、自分で、あるいは共同でつくり出した目標だからである。

一緒にやっている、一つひとつの活動に、大人も子どももそれぞれのイメージがある。大人が先行することもあり、子どもが先行する時もある。高い所の掃除はそうやると危ないとか、こうしたほうがいいのか、互いの

アイデアをもち寄って進める。子どもの言うことのほうが正しいことがしばしばである。

### 紙飛行機飛ばし

友達の父親が作った紙飛行機がすごく飛んだ。それがおもしろくてしばらくの間、飛行機を作ることに熱中した。これにももつと小さい時からの成長の歴史がある。

二歳九か月。二階の階段から私がヒコキと言って紙を落とした。それから子どもは白紙を落として、私が「オテガミ」と言うと、それがおもしろくて延々と続け、十五枚も次々に落とされた。自分が手放した物を拾ってもらって、再び自分の手に取り戻す遊びでもあった。

四歳児・年中組。幼稚園の帰りに友達の父親に外の大きな階段で紙飛行機飛ばしをし



てもらい、おもしろかった。その前日には、紙飛行機にひもを付けると言って大人を驚かせた。飛ばすための飛行機なのに、飛んでいってしまわないように、ひもを付けるという、大人には考えられない発想である。次の日にはジジチャーンと大声で呼んだ。自分が作った飛行機がよく飛ぶのを見せたかった。二階から飛ばしたり、階下から飛ばしたり。私は一所懸命考えて、よく飛ぶ紙飛行機を作った。私が一所懸命やると、子どものほうがフォローしてくれる。子どもを先にするのではなく、大人が先に立つくらい気で、しかし子どもを先にして参加しなければならないから、それにつき合うのには幼児に對するのは違ったエネルギーと技術がいる。紙飛行機の遊びは、小学生になってもおもしろい。

### 乳幼児精神発達診断法を参照しつつ

私の初期の研究に『乳幼児精神発達診断法3—7歳』（津守眞、磯部景子 大日本図書 一九六五）がある。

私は発達を評価する考えはとらないので、これを引用することはこれまでほとんどしなかったが、今回、日常生活の中で幼児の成長を再考していて、次に引用したい。これらの発想項目のもとになっている逸話記録は、いまは亡き守永英子さんが主になって、一九五三年から一九五八年にかけてお茶の水女子大学附属幼稚園で採集した。五十年後、二〇〇一年から二〇〇七年に私が家庭で身近に見ている幼児にもほとんど同様の記録があるのは驚く程である（註）。

### かくれんぼ

社会42・54　かくれんぼをして、みつからないように、ひとりでものかげにかくれる。〈42〜54〉

「先生が鬼になり、みんなかくれにいく。先生がさがしにくると、たかおは本を持って部屋からのこのこ出てくる。たつおも出てくる。ちゃんとかくれたのはふたりだけである。『たかおちゃん、鬼よ』と先生にいわれる

と、たかおは本を持ったまま目をおさえている。つぎはまた先生が鬼になる。ふみおは、ひとりで物置にかくれるが、先生が近づくととび出してくる。」「No.176　3才2学期」

社会48・57　かくれんぼをして、さがす役とかくれる役とを理解する。〈42〜48〉60

「よしおとしんじと、かくれんぼをはじめる。しんじが目をつぶって『もういいかい』といって部屋の中央をあるいていく。よしお『まだ出てきちゃいけないだよ』といいながら、戸口の方にいく。しんじが目をあけてうろうろすると、せいこ『あすこ、外の方』と教える。それで、しんじ外に出ていく。せいこが教えても、だれも何ともいわない。』

### 紙ひこうき

探索42・72　紙ひこうきを折ろうとするが、こまかいところには無頓着で、目的だけを達しようとする。M〈36〉

④2) Fへ42)④8)へ

「そういち、ひさふみ、ひこうきを折る。まず半分に折り、そのあとは、左右対称になっているかどうかには頓着せず、細長い先のとがったかっこうに折る。いっしょうけんめい折るが、こまかいところがうまくいかず、横にさけてしまう。『あ、また破けちゃった』と破つてすててしまう。また新しい紙を持ってきて折る。」「No.555 4才2学期」

探索66・90 よくとぶように、ひこうきの折り方やとばし方を工夫する。Mへ54)⑥6)へ72)へ

「四人の男児が廊下でひこうきのとばしくらべをしている。『よい、どん』でとばす。とばすとすぐにとんでいって、自分のひこうきをひろい、一番、二番、三番、四番とおのおの自分の順序をいう。順番は全く事実にもとづいている。二、三回とばすと、みんなひこうきのとばさが曲がったり、機首が曲がったりしたのをなおす。よしおは自分のひこうきをなおすと、ひとりでとばして

みる。とてもよくとぶ。それをとりにいきながら、『よくとぶなあ』と感歎したようにいう。また四人で『よい、どん』と声をそろえていう。ますおと、かんいちろうとが、ほとんど同時に落ちる。

すると、ふたりはとんでいくが、すぐにひこうきをとらずにくらべてみる。つぎにすると、ますおは、肩の上からとばさずに、腰の少し後の方に手をやってとばす。『ずるいぞ、ますおちゃん』といわれる。それからじきに、ひこうきをつくりなおすために、みんな部屋にはいる。」「No.692 4才2学期」

(保育研究者)

註

社会、探索は分類項目、最初の数字は月数と項目番号、MFは性別、へへ内は、○で囲んだ数字は代表年齢、上の数字は、少数の子どもができるようになる年齢、下の数字は、ほとんどの子どもができるようになる年齢である。